〔PBLの風と土　第30回〕

学びと成長につながる活動のピーク設定

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目となる2024年度は再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. 受け身としての消費者主義の回避へ

「高校と大学の一番大きな違いは、時間割を組むことだった。」これは筆者の博士論文を指導いただいた恩師、渥美公秀先生の言葉である。正確にいつの発言かを記録していないものの、コロナ禍が一定の収束を見せる中で、新潟県小千谷市の塩谷集落でのアクションリサーチに同行した際、レンタカーの車内で伺ったことは明瞭な記憶にある。背景にあるのは「シラバス」によって授業内容を示すことで、学生には授業の内容が伝わるのか、という点である。

渥美先生は2022年度と2023年度に大阪大学大学院人間科学研究科の研究科長を務めたこともあり、その2年間は筆者が「共生行動論特講」という授業を非常勤講師として担わせていただく機会を得た。この授業は公認心理師の資格取得に関わる科目として、「家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践」という長い副題が付いていた。加えて、渥美先生が2年間の研究科長を終えた後には再び担当に戻られることが前提であったため、渥美先生が担ってきた時代、筆者が担当していた時代、再び渥美先生が担当する時代、それぞれに内容に差が出ないよう、少なくとも筆者が担当する2年間は、従前のシラバスで授業内容を組み立て、しかし運営については筆者の知識や経験をもとに展開することにした。ちなみにこの授業はクオーター制での授業で、8週間の出講のうち7回を2コマ連続で行い、2コマ目は受講生どうしの対話で1コマ目の内容を深めるという形式だったこともあり、15回の授業を15週間で展開するセメスター制に筆者には新たな経験を得る機会となった。

写真1：雪深い小千谷市塩谷集落への道中の風景
（筆者撮影、2023年3月3日）

そうして、大阪大学と立命館大学の学生気質や、昨今の大学生の文化などについて意見交換をする中で出てきたのが、冒頭の「時間割を組む」という観点である。高校までは学校側によって編成された時間割が提供されるのに対し、大学では自らが学びの環境を設計していかなければならない。英語では同じstudentという単語ではあるものの、学校教育法第88条にも記されているように、大学で学ぶ者は生徒ではなく学生と呼ばれ、高校までの教師―生徒という関係からの解き放たれた上で、自立した学生として自らの学びの環境をデザインしていく必要がある。ただし、現在の学生らはどこまで自らの学びと成長に向けて「時間割を組む」ことができているか、同一科目を同一シラバスで担当した筆者らは共通の関心事として抱いた。

本連載では前回および第14回において、災害復興支援活動を組み込んだ授業「シチズンシップ・スタディーズI」（旧科目名称「地域活性化ボランティア」の取り組みを紹介した。教室での学習と教室以外の現場での活動を組み込んだサービスラーニング科目ということもあって、シラバスを見ただけでは授業の本質を理解するのは困難であることに加えて、そもそも時間割に設定されている時間内だけでは学習が完結しないものである。そこで前回の予告のとおり、災害復興という非日常の現場ではなく、地域の日常生活の現場での活動を組み込んだ取り組みから、京都の三大祭の一つである「時代祭」を事例に取り上げる。結論を先取りすれば、時代祭でのサービス・ラーニングは、かつてデイヴィット・リースマンが警鐘を鳴らした「学生消費者主義」[1]に対し、むしろ学習者が中心の学びのコミュニティの形成を通じた学びと成長の環境づくりへの挑戦として、立命館大学としての現代的な回答の一つである。

2. 京都の大学ならではの地域参加を

立命館大学サービスラーニングセンターが時代祭をテーマとした正課科目を開設したのは2006年度である。きっかけは2005年度に文部科学省による現代的教育ニーズ取組支援プログラム（いわゆる現代GP）に立命館大学が応募した「地域活性化ボランティア教育の進化と発展」の採択であった。採択された内容と一連の取組の概要は桜井（2007）や桜井・津止（2009）にまとめられている。簡潔に整理すれば、私立総合大学として全学機関として設置

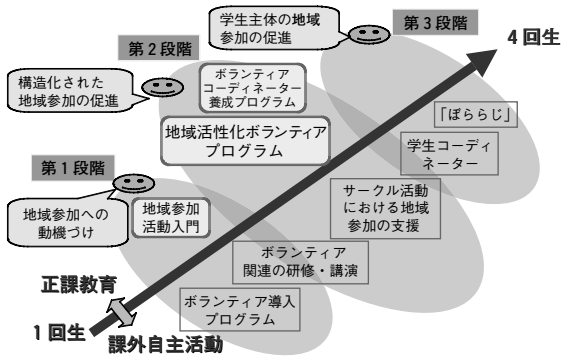

図1：地域活性化ボランティア教育の深化と発展」の体系（桜井, 2007, p.29）

したボランティアセンターにより、正課科目と課外活動の有機的な関連づけのもと、入門から応用に向けたプログラム展開と講義・演習・フィールドスタディを体系的に配置した教育プログラムを展開するというものである。

時代祭をテーマとした正課科目は「地域活性化ボランティア教育の進化と発展」の核として、「地域活性化ボランティア」という名称の授業として開講されることになった。その特徴は山口ら（2015）でも整理したように、1回生から受講可能な科目な活動型の科目であり、演習系の授業という位置づけのもと、42時間の現場での活動が成績評価の上での必須要件としたことが挙げられる。そして1回生から受講可能な講義型の授業「地域参加活動入門」の履修も促すことで、講義型の座学で基礎知識を習得しつつ、活動型での体験学習を通じて地域社会の一員としての市民性の向上が期待された。開講初年度の2006年度は、平安講社第八社を受入団体とした時代祭応援プロジェクトの他、里山保全と農山村からの情報発信（里山ねっと・あやべ／綾部市）、笹葺き古民家再生（美しいふるさとを創る会／宮津市）、百人一首のふるさと小倉山復活（NPO法人教育文化芸術振興協会／京都市）、「こどものまち」サポート（チャキッズタウン）（京都市下京青少年活動センター／京都市）、障害のある子ども達の放課後活動支援（京都市西京区川岡小学校／京都市）の5つのプロジェクトが設定された。

そもそも時代祭とは何かについて簡潔に説明しておこう。時代祭とは、5月の葵祭（上賀茂神社）と7月の祇園祭（八坂神社）に並ぶ京都の三大祭の1つであり、平安神宮の例大祭として開催されているものである。そもそも平安神宮は、明治政府の成立による首都機能の東京への移転（いわゆる東京奠都）による京都の衰退が叫ばれる中、1895年（明治28年）に平安遷都1100年を記念して京都で開催された内国勧業博覧会の際、平安京遷都当時の大内裏の一部を復元する計画のもと、平安遷都を行った天皇である第50代桓武天皇を祀る神社として創建され、その後1940年（昭和15年）には平安京で崩御した最後の天皇である第121代孝明天皇孝明天皇が祭神に加えられたという歴史がある。

このような歴史的背景を持つ神社を維持・管理する組織として京都の市民によって設立されたのが「平安講社」であり、この市民組織の設立記念事業として始められたのが時代祭である。

平安神宮内に置かれた平安講社本部が編集・発行、時代祭当日に販売されるパンフレット（平安講社本部，2014）には、時代祭の要点が平明に解説されている。少し長くなるが、引用して紹介したい。

> 時代祭は、平安神宮の創建を奉祝して京都市民あげて始められた祭で、毎年京都の誕生日にあたる平安遷都の日、10月22日に行われている。この時代祭は、当初から、京都が日本の首都として千有余年にわたって培ってきた伝統工芸技術の粋を動く歴史風俗絵巻として内外に披露することを主眼としている。このため各時代行列に使用する衣裳や祭具の一つ一つが、厳密な時代考証をもとに作製された本物であるところにその特徴がある。
>
> （平安講社本部, 2014, p.1）

このように、時代祭は10月22日という京都の誕生日に、市民組織である平安講社によって「動く歴史風俗絵巻」として、平安京が置かれていた1200年の歴史と文化を「時代行列」を通じて理解すると共に、今後もまた平安な暮らしを送ることができることを祈念する機会である。そして約2,000名・約２キロにわたる「時代行列」は、明治維新時代から平安京の造営された延暦時代へと遡る構成となっており、立命館大学は隊列先頭の維新勤王隊列（担当：平安講社第八社）運営を約半年かけてサポートする役目をいただいている（写真2参照）。

写真2-1：平安神宮オリエンテーション
（2018年5月20日）

写真2-2：衣装の虫干し [通常は8月]
（2020年10月11日、コロナ禍で祭礼中止）

写真2-3：入隊式準備・参列（神事）
（2013年9月20日）

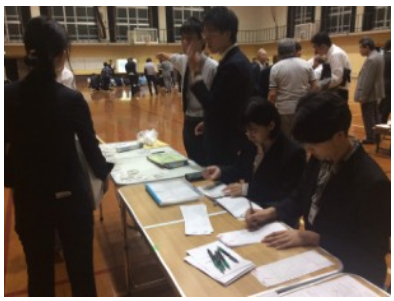

写真2-4：隊列行進練習・受付補助
（2019年9月20日）

写真2-5：衣装渡し
（2023年10月14日）

写真2-6：宣状式参列（神事）
（2022年10月15日）

写真2-7：集合場所の設営・進行路案内
（2016年10月22日）

写真2-8：時代祭・参列
（2019年10月26日）

写真2-9：衣装戻し
（2022年10月30日）

写真2：時代祭応援プロジェクトにおける時代祭の祭礼終了までの流れ（全て筆者撮影）

3. 立命館大学と平安講社第八社との縁

こうして約半年かけて地域に関わる時代祭が、地域活性化をテーマとした地域参加活動を組み込んだ授業に適するものであることは、ボランティアやアクティブ・ラーニングについての素養のある方にとっては想像に難くないだろう。実際、京都の大学で学ぶ学生にとっては、現在の地域社会の有り様に触れるだけでなく、京都というまちの歴史的・文化的な魅力に触れることができる恰好の機会である。もちろん、相手がある以上、大学側の事情や希望を前面に出すだけでは、こうした一定の期間にわたり活動の現場で学生らを受け入れていただく教育プログラムは成立しない。送り出す／受け入れるという二者関係のもと、双方に短期的・功利的な観点が際立てば、すなわちメリット・デメリットという互いの価値基準で相対的な判断が行われば、本連載第23回・第24回などで取り上げてきたパートナーシップの構築のもとでの新たな価値の創造は困難となる。

2006年、立命館大学ボランティアセンターがサービスラーニング科目の開始初年度に時代祭を活動先に取り上げるにあたっては、当時の専門職員（足立陽子さん）が平安神宮に打診したことから始まっている。図2に示したように、2006年10月6日の京都新聞に掲載された記事「ボランティアがやってきた」に、一連の経過がまとめられている[2]。そもそも、時代祭は葵祭や祇園祭に比べれば歴史が浅いと言われるものの、学区1200年の歴史を遡る祭礼であることに加え、土日や祝日などの曜日ではなく10月22日（雨天の場合は翌23日に順延）に日付が固定されて催行されることもあって、各時代行列を担当する全11社の平安講社と各種団体等（京都青年会議所、京都市地域女性連合会、大原観光保勝会、桂･桂東婦人会、京都花街組合連合、京都料理組合、白川女風俗保存会、その他有志の方々）に重責がかかっている。前掲の京都新聞の記事では、平安講社本部の事務を取り扱う平安神宮の神職（赤木尊文禰宜）の言葉として「当日限定のアルバイトは既に珍しくない」ことと「長期にわたって学生が地域に入り込み、住民と一緒になって行事に取り組むというケースは、時代祭百年余の歴史を通じ、かつ

京都新聞ＴＯＰ▸京都おもしろ宣言

観光・京都おもしろ宣言

| バックナンバー▼ |

時代祭　4

ボランティアがやってきた

時代祭の行列の先頭を歩く「維新勤王隊」列。これを担当する平安講社第八社（京都市中京区朱雀学区）で今年、祭りを前に画期的な変化があった。大学生ボランティアの長期受け入れである。

「学生に、時代祭を地域のなかで学ばせてほしい」―。講社本部の禰宜（ねぎ）赤木尊文（63）が、立命館大ボランティアセンターからこんな申し入れを受けたのは、今年五月中旬のことだった。

当日限定のアルバイトは既に珍しくない。しかし、長期にわたって学生が地域に入り込み、住民と一緒になって行事に取り組むというケースは、時代祭百年余の歴史を通じ、かつてなかったことだ。

赤木は思いをめぐらした。「時代祭がどうして維持できているか、地域の苦労を知ってもらえるいい機会になる。十社のうち、鼓笛の練習など長い準備をする八社だったら対応できないか」。

赤木尊文さん

講社常務理事で八社の代表多田房男（80）は話を聞いて戸惑った。「かえって、準備の足手まといになるのでは」。しかし「地域の歴史を学び、地域の活性化に役立てたいという思いは素晴らしい。地方から来ている学生にも京都を学ぶいい機会になると思った」と話す。

学生ボランティア受け入れは、実現した。

８月、赤木はセンターのプログラムに組み込まれた平安神宮での講義に臨んだ。明治初年、さびれきった京都の復興に、市民が立ち上がった象徴が時代祭。「この祭りこそ、京都活性化の原点。地元で、地域の人たちと一緒に、このことを体で知ってほしい」―。赤木は10人の学生を前に熱弁を振るった。

先月20日、恒例の八社勤王隊入隊式の当日。市立西ノ京中学の体育館に設営された会場では、ボランティアの経済学部３年生橋本美和子（20）、政策科学部３年生の恒川史恵（20）、産業社会学部２年生の牧良子（20）の３人が受付に座り、慣れないながら懸命に、集まってくる100人ほどの関係者をさばいた。

多田房男さん

学生たちはそれまでに、装束の虫干し作業や祭りに向けた役員のあいさつ回りに同行するなど、朱雀学区に入り込んで、同月初旬から、事前のさまざまな行事の手伝いを続けている。橋本は驚いた。「時代行列を実現するのに、その前に、寄付金集めやあいさつ回りとこんなにいろいろ地域で面倒なことが行われているんだ」と。

京都に生まれ育ちながら時代祭を、きちんと見たことがなかったという産業社会学部二年生の田中敏貴（21）は「伝統の祭りのさわりだけでも学びたい。普通じゃ参加できないこと。誇りに思い、22日が楽しみ」と。

東京出身で、外国人に日本の文化を伝えたいと、国際関係学部に今年入学した菅野未可（18）は「いろいろな工夫や、地域の人たちの努力が、日本の誇る伝統を守っている」と、強く感じ、感動したという。

前列左から恒川史恵さん、橋本美和子さん、牧良子さん。後列は足立陽子さん（右から２人目）と田中敏貴さん、菅野未可さん（同４人目と６人目）

学生たちと一緒に来ていた同センターのボランティアコーディネーター足立陽子（26）は、プログラムの成果を実感している。「見る側から、地元で支える側にまわることで、祭りへの考え、姿勢がずいぶん変わったようだ。列に参加できない女子学生は、ビデオや冊子の作成など記録係として、八社の隊列保存に貢献しようと自発的に提案してきた」と話す。

今年から始まった学生ボランティアの活動は、伝統的な運営方法に新しい血を注入し、時代祭を一層活性化する端緒となるかもしれない。

（敬称略）

［京都新聞　2006年10月５日掲載］

| バックナンバー▼ |

CONTENTS

元気シナリオ ― 識者が提言

とっておきの京都論 ― 魅力を語る

みやこの仕掛け ― 知恵と工夫

人ありて ― 魅力育む

京の観光力 ― 集客５千万人へ

京都を学ぶ ― 京都検定

変わる京都 ― 町家・商業・施設

京都を歩く ― 体験・カフェ etc

京を知る ― 歳時記

京都新聞は２００６年３月、観光都市京都のパワーアップを目指して企画「京都おもしろ宣言」をスタートさせました。人々の価値観はいま、物の豊かさから心の豊かさに移りつつあります。京のまちは伝統、歴史、自然環境と、どこを取っても格別な魅力をたたえてきました。京都新聞はそうした魅力に光を当て、京都を元気にする紙面を多彩に展開するとともに、フォーラムやイベントの開催、伝統文化体験の案内など、さまざまな「おもしろ」企画を発信していきます。

観光・京都 おもしろ宣言

Copyright(C) 1996～2006 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

京都新聞

図2：時代祭「ボランティアがやってきた」
（2006年10月6日の京都新聞掲載分の転載記事）

てなかった」こと、その上で「鼓笛の練習など長い準備をする八社だったら対応できないか」との判断がなされたことが記されている。

平安神宮を通じて受入可能性が示された後、平安講社第八社において立命館大学側との受入窓口として担当いただいたのが太田興さんであり、現在まで引き続き受け入れ担当者となっていただいている。太田さんご自身が立命館大学の卒業生ということもあり、第八社内の役員等からの期待と信頼のもと、第八社に「立命班」という枠組みが設けられ、太田さんがその担当として学生らの指導に就く、という構図が取られている。ちなみに筆者は2013年度から現在まで（ただし、学外研究期間中の2017年度を除く）の担当のため、既に150人ほどがお世話になってきた中、全ての受講生との関係構築を図ってきたのは、実質的に太田さんのみ、とい

う状況である。現在は平安講社第八社の総務担当の理事として平安神宮との調整役でもあり、例えば「維新勤王隊の鼓笛隊の中には女性がいなかった」という当時の世情を重視しなければならない件には、女子学生が時代祭全体の隊列の中で役割が得られるように差配（具体的には白装束で隊列内での案内旗を掲げて練り歩く役割）をいただいている。

太田さんによる丁寧で誠実な対応のもと、時代祭に、また地域での活動に惹かれた受講生は「立命班」の立場を越えて、授業期間終了後にも継続的に太田さんのもとに足を運ぶようになる。それもあって、時代祭では、受講後に有志の学生が時代祭応援プロジェクトの「サポーター」となり、スーパーバイザーである太田さんと現役学生とのあいだのつなぎ役となっている。図3に示した京都市の中京区役所のウェブサイトで2022年1月28日に公開となった太田さんに関する記事も、サポーターとなった学生らが3人で取材し、執筆したものである。そこにはご近所の方からのお誘いで時代祭の役員になって20年になること、阪神・淡路大震災の際に兵庫県西宮市で被災されたこと、災害時に何もできないと悔しさを抱かないように京都での防災活動に取り組んでいること、これらが要領

ページ番号293756　　2022年1月28日

■ 平安講社第八社　理事，朱八地域自主防災会　専門協力員　太田さん（令和4年1月28日更新）

★今回は，京都の大学に通う学生さんに区民ライターとして執筆いただいています！

今回の「地域活動をしている中京のすごい人！」は，時代祭や朱八地域自主防災会の役員など，様々な地域活動をされている太田興さんをご紹介します。

京都三大祭の一つとして，毎年10月に行われる時代祭。その当日に向けて，平安講社第八社（時代祭の運営，祭具や衣装の管理を担う市民組織）では，衣装の虫干しや寄付金集め，維新勤王隊の隊士募集から入隊式，練習など，1年間を通して様々な活動を行っています。太田さんは，ご近所で平安講社の役員をされていた方から「時代祭の役員をしてみないか」と声をかけてもらったことをきっかけに，現在まで20年以上にわたり時代祭の活動に携わっておられます。「お祭りに関わっていると，京都，地域のことが好きだという人に出会うことができます」と太田さん。「そういう人が，京都という地域を理解し，地域を大切にするという想いを持ち続けてくれるんです。」と語られる姿からは，これからの祭を支え，地域を担っていく次の世代への強い期待が伝わってきます。

また，太田さんは，兵庫県西宮市にて阪神淡路大震災で被災し，何もできなかったという悔しい思いを経験されています。「京都の人たちに自分と同じ気持ちを味合わせたくない」という想いから，自主防災会などの地域の防災活動に携わり，朱八学区地域の子どもたちとの防災まち歩きなどに取り組まれています。さらには，市民への講演会をはじめ小学校や中学校，大学でも，年間に約20回もの防災に関する授業に講師として参加するなど，京都市中を駆け巡っておられます。講演では「被害は現場で起きている」というキーフレーズを毎回掲げ注意を呼びかけられます。「実際に被害が起こるのは住民が住む場所や勤め先です。講演を聞いて終わりではなく，現場の人たちが災害を自分ごととしてとらえて行動して安全を確保していかないと，被害は減っていきません」と語られました。

生まれ育った中京区への想いを尋ねると，「中京区は，多くの人に多くのことを教えてもらったまち。何らかの形で恩返しをしていきたいと思っています」と語られました。「『恩返し』は恩をくれた人に恩を返すことですが，恩をくれた人はもういらっしゃらないということも多いんです。だからこそ，中京区だけに限らない次の世代に想いを伝えていくことが『恩返し』だと考えています」と太田さん。より多くの人，特にこれからを生きる若い人たちに，地域への愛着や災害に対する当事者意識を持ってもらいたいという想いを原動力にして，日々地域活動に励んでおられます。

今回の取材を通して，こうした太田さんの想いに触れることで，学生ライターである私たちも，地域を守る存在になるべきだという使命感が生まれました。

図3：「区民ライターがゆく!頑張る中京人・魅力再発見」より（2022年1月28日、中京区応援サイト「なかなか中京」）

よくまとめられているが、一連の物語は太田さんの語りだけでなくサポーターたち自身が受講生の時代に実際の現場で共に活動しながら浸ってきたものでもある。

4. 過活動がもたらす現場からの反動

この時代祭応援プロジェクトは立命館大学におけるサービスラーニング科目の開講初年度である2006年に始まり、2014年度に1年の休止期間を挟んだものの、2024年度まで継続的に実施されている。2014年度に休止となったのは、学生らの関わりが平安講社の第八社において本来の市民組織という根本を揺るがせてしまうのではないか、という懸念が浮上したためである。そのため、2013年の時代祭の終了後、12月に行われた役員会の議論を経て、一旦、従来の形に戻すという「中止」ではなく「休止」の扱いとして、漫然と継続しないという方針が採られた。当時、太田さんは「活発な立命班の活動」に対する「反作用」として捉えられていたものの、大学側の担当者としては学生らの過活動による地域の不活性化をもたらしてしまったと内省し、その後の授業設計の在り方についての示唆を得ることとなった。

以前、本連載第4回において「立命館大学におけるサービス・ラーニングの展開パターンと型との対応」という図解（山口と河井，2016，p.49）を紹介した。この中で時代祭での学生らの動きは「拘泥的進行」と示したパターンに相当する。これは、本来到達すべき目標に対して、その目標に近づけようと学生らが果敢な努力を重ねる傾向を示したものである。もともとこの図解は、そうした努力が重ねられることが問題ではなく、地域社会の一員としての振る舞いが求められるはずが、学生らの自己完結した活動によって活動の成果（時には自己満足の水準にさえ達していない成果物）を地域に押しつけることになる可能性を危惧したものである。しかしながら、受入の「中止」に至った2013年度の状況は、平安講社第八社の一員としての「立命班」内の一体感や連帯感が高く、むしろ活動先が求める水準を超越した活動がなされたことにより、平安講社第八社の組織構造を不安定にさせてしまったという見方ができる。

時代祭応援プロジェクトは1年間の休止を経て、2015年度に再開されるにあたり、学習の一環として実践に携わるという趣旨が現場で貫かれるよう、自治の担い手が時代祭を担ってきた歴史的・文化的背景を関係当事者が今後も大事に扱われるように、と、時代祭以外の地域活動も織り込む形とした。時代祭では10月22日という時代行列の当日が活動のピークである。しかし、そのピークでサービスラーニング科目としての活動は終了ではなく、ましてや活動を通じて学習するというサービス・ラーニングという手法においては現場での活動が終了してから学びを深めていく必要がある。そのため、例えば消防団による夜回りの活動への参加、中京区役所による対話の場への参加、中京区民の交流機会である「ふれあいまつり」のお手伝いなど、学生の自主企画による自己完結型の活動の余地が減る方向への舵取りがなされているが、「時代祭応援プロジェクト」という名称で募集した活動で、なぜ複数の地域活動に携わる必要があるのかの理解を促し、非日常の経験として時代行列の一員を担ったという高揚感から来る自主活動の企画・実施への発露をどう抑えるか、授業設計と運営を担う筆者の課題である。

2024年9月7日、2023年度に卒業した学生で、本連載では第15回・第17回そして前回の第29回にて取り上げた福島県楢葉町に、時代祭応援プロジェクトを2022年度に受講した学生が訪れたため、改めて地域で学ぶ授業を受講したことの意義について感想を尋ねたところ「授業を取らないと、時代祭について知ろうと思わなかった」と反ってきた。ちなみに彼女は楢葉町で活動する「平和人権フィールドスタディ」の受講生でもあり、その他、各種の課外活動にも取り組んでいる。そこで次回はあえて授業として地域社会でのボランティア活動を組み込む意義について、京都府立堂本印象美術館の事例から取り上げる。（gucci@fc.ritsumei.ac.jp）

【引用文献】

上沼克徳. 2015. 学生消費者主義の論理と意義. 商経論叢 50(3・4), 35-55.
平安講社本部（編）. 2014. 時代祭：The Jidai Matsuri Festival. 平安講社本部
喜多村和之. 1996. 新版 学生消費者の時代：バークレイの丘から. 玉川大学出版部.
松下佳代. 2002. 学生消費者主義と大学授業研究：学習活動の分析を通して. 京都大学高等教育研究 8, 19-38.
Riesman, D. 1980. On Higher Education: The Academic Enterprise in an Era of Rising Student Consumerism, Jossey-Boss Inc. (喜多村和之ら(訳) 1986 高等教育論. 玉川大学出版部.)
桜井政成. 2007. 地域活性化ボランティア教育の深化と発展：サービス・ラーニングの全学的展開を目指して. 立命館大学高等教育研究 7, 21-40.
桜井政成・津止正敏(編). 2009. ボランティア教育の新地平：サービスラーニングの原理と実践. ミネルヴァ書房.
山口洋典・河井亨・桑名恵・川中大輔. 2015. 地域参加を促す系統的な履修プログラムの体系化の方途. 立命館大学高等教育研究 15, 131-144.
山口洋典・河井亨.(2016) サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方. 京都大学高等教育研究, 22, 43-54.

【注】

1　「学生消費者主義」は1970年代から1980年代にかけての大学受験易化から難化への流れの中で、教員集団による大学自治が受験生を取り巻く市場の影響を受け、学生が「お客様」として位置づけられる時代の到来を指摘したものである。リースマンの『高等教育論』（Riesman, 1980）の筆頭訳者である喜多村和之が複数の著書により、そうした影響を日本で紹介している（例えば、喜多村, 1990, 1996）。ただし、リースマンによる「学生消費者主義」は、学生に対する市場の影響を否定的・悲観的に扱うだけではなく、むしろ肯定的・積極的な意味で捉えようとする提案でもある。例えば、松下（2002）は「消費者としての利益を守りその力を賢明に活用することによって、真の大学教育を獲得できるようにする」ことが論点であり、「学生の力が教育水準の低下につながらないよう大学教授団と学生の間に力のバランスをもたせる」ために「学生を単なる受動的な消費者から能動的な生産者に変えていくことが、これからの大学教育の課題となる」（p.20）とリースマンの主張を端的に整理している。その他、マーケティング論を専門とする研究者により、米国の消費者主義運動と市民的な権利意識との関連づけのもと、日本における学生消費者主義について授業評価制度を事例として取り上げた論考（上沼, 2015）もあるが、本稿ではこれ以上は立ち入らない。

2　この記事は長らく京都新聞の「観光・京都おもしろ宣言」の特集記事の1つとして一般に公開されていた。少なくとも2016年3月までは公開されていたことが確認できている。